

SUTHERLAND

Instrument GRADE AUDIO



Ph3D

Sutherland Engineering

米国カンザス州に本拠地を置くサザーランド・エンジニアリング社は、音楽再生において常にパーフェクトを求める男“ロナルド・ローガン・サザーランド”によって、1986年に設立されました。彼が追い求めたのは音楽に込められたエモーションを完全に出し切ること。それはアンプの増幅においてどんな狭雑物の介入をも許さず、ただひたすらにピュアなシグナル伝送を実現することにありました。「シグナルパスが短くなれば短くなるほど音楽が近づいてくる」。彼のアンプ設計に対するの基本理念がこの言葉によって集約されています。また彼が一貫して標榜する“インストゥルメント・グレード”。これは「アンプは単に音楽を再生するだけの道具ではなく、音楽を発生し形づくる楽器と同列のものである」。というサザーランドのアンプ作りにおける確固たる自信の発露となっています。サザーランドの作品は、1992年のCESで衝撃的なデビューを飾ったC-1000プリアンプで始まり、1994年登場のC-1001プリアンプとA-1000パワーアンプ、1996年にリリースされた2000番シリーズ、そして1998年に追加された800シリーズ、という2年毎に新製品の投入を行う精力的な活動により、ハイエンドシーンにおいて確固たる地位を築くに至りました。しかしその後はOEM依頼による他社製品の開発や設計、ならびにその製造やコンサルタント業務等に忙殺されることとなり、自社ブランドのアンプは久しく市場から遠ざかってしまうという結果を招いてしまいます。しかしそれは商売人というよりも、あくまでも技術にこだわるサザーランドの志向を如実に表す経緯といえるかも知れません。しかしそれら数年にわたってのブランクを

一気に取り戻すが如く登場した PhD は、その内容の斬新さと相変わらずの音の良さによって、瞬く間に以前と同様の人気と評価を勝ち得るに至っています。そしてここに日本再デビュー第二弾として登場



Ph3D のベースとなったモデル PhD

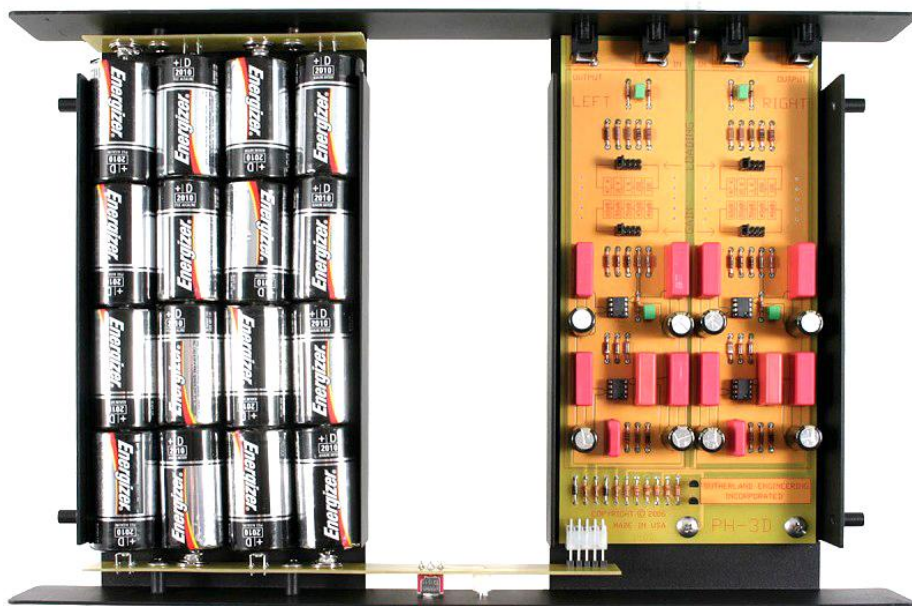
する Ph3D は、前作 PhD のコンセプトをそのまま継承することはもちろん、ハイエンド機一辺倒だったサザーランドのアンプ作りにおける新たな挑戦モデルとなっています。そしてその目論見は、とてもリーズナブルな価格でありながら上級クラスを凌駕するハイパフォーマンスを実現することによって、もの見事に成功を果たしたといえるでしょう。またそのことを実証するように、本国アメリカでは ザ・アソリユート・サウンド誌の“2007・エディターズ・チョイス”を獲得すると共に、“フォノステージ・オブ・ザ・イヤー・2007”を受賞するに至っています。



Ph3D

サザーランドの Ph3D には、現在市場に出回っている他のフォノイコライザー・アンプとは一線を画した内容が盛り込まれています。それは内部構成を一目見て分かる通り、その電源部に単一乾電池を採用していることがあげられます。これは今までありそうでなかった、正に“コロンプスの卵”的な発想によるものといえるかもしれません。しかし理想のバッテリーである乾電池によってアンプを駆動するということは、そもそもが凝りに凝ったその電源部の素晴らしさによって不動の評価を勝ち得てきたサザーランドにとって、次なるステップそして究極の増幅へと踏み出すためには必然のことであったともいえるでしょう。ご承知のとおりアンプの中で良質なものを作るのが最も困難なのは、フォノイコライザー・アンプであることは広く知られています。それは MC カートリッジが発生する微小な信号を、60dB=1,000 倍に増幅しなければならないからです。そしてロン・サザーランドは述べています。「アンプは入力信号を増幅するものではない。電源からのエネルギーによって、信号を必要な大きさへと変調するものである」。このことから分かる通り、出力される信号のクォリティーは電源の質に依存していることとなります。また

これらは既に多くのメーカーおよびオーディオファイルによって認識されており、ハイエンドアンプにおけるセパレート電源化、ならびに電源コンディショナーや高価な AC ケーブルの使用等によって対策が施されるに至っています。しかしそれらは効果があったとしても、パーフェクトとはなり得ないことも事実です。なぜならば歪みの発生およびそれに伴った信



号の汚染は、根本である AC 電源の質だけにはとどまらず、各機器が持つ電源部それ自体が発生させてしまうノイズが悪影響を及ぼしているからに他なりません。したがってそれらの問題を根本から解決するには、家庭の AC コンセントを使用しないことであり、またアクティブな電源部を用いないということに尽きるでしょう。サザーランドの Ph3D はパッシブ電源である乾電池をその筐体内に搭載し、そのみで完結した動作を行う唯一のアンプとなっています。これによって Ph3D は、AC 電源やアクティブ電源が引き起こすノイズや歪みから見事に開放され、正にアナログアンプの最終兵器と呼ぶにふさわしい、未曾有の純度と静けさを獲得することに成功しています。

Construction

Ph3D はフロントパネルおよびリアパネル、そしてシャーシー並びにケースの全てがぶ厚い冷



間圧延スチールで構成されており、電磁気的な干渉からサーキットを守る強固な筐体を実現しています。そして Ph3D はその電源に片チャンネル 8 本、両方では 16 本の単一型アルカリ乾電池を使用します。そのサーキット構成は PhD をベースとして、さらなるシンプル化が施されたものとなっています。しかしアクティブの NF 型とパッシブの CR 型両者のメリットを取り入れた、ハイブリッド型のイコライジング回路はそのまま踏襲され、またチャンネル・セパレーションをきっちりと確保するために、デュアルモノ・コンストラクションの構成も同様となっています。さらに心臓部のパーツには、Wima 製のポリプロピレン・フィルムコンデンサー、そして Dale や Vishay 製の金属フィルム抵抗を使用する等、PhD と同等といえる万全の配慮が行われています。またサザーランドのアンプを象徴するともいえる、まるで工芸品を彷彿とさせる芸術的なサーキットレイアウトはそのシンプルさを極め、それは音を聴くまでもなく美しい調べを連想させるに十分なインパクトを放っています。しかし Ph3D の真価は、そのリーズナブルな価格にこそあるかもしれません。それは音質を追求した高級なアンプにとっては必然となっている、高コストの電源部や充電回路等を必要としないからであり、実際 Ph3D はハイエンド機に肉迫するクォリティーを達成していながら、圧倒的ともいえる現実的な価格を実現することに成功しています。



Features

Ph3D は乾電池ドライブに合わせ、徹底したパーツの選択と回路のシンプル化が図られています。したがって電池の寿命は実際の稼働において 1,200 時間以上を達成しており、優に LP1,500 枚以上を聴くことが可能となっています。Ph3D は左右のチャンネルが独立で、ゲインと負荷抵抗を切り換えることができます。その設定はマザーボードに搭載された、金メッキのヘッダー・ピンとジャンパーで行う方式が採用されており、高い接触圧力と広い接触面積によって、カートリッジからの微小な信号を何ら損なうことのない伝送を実現しています。それはシグナルパスの増大を招いてしまう外部スイッチの設置はもちろん、音質劣化の要因となってしまう DIP スイッチを排除した、サザーランドならではのこだわりとなっています。ゲインの変更はそのヘッダー・ピンとジャンパーの組み合わせを変えることにより 40dB、45dB、50dB、55dB、60dB から選択することができます。そして負荷抵抗は 100Ω、200Ω、1KΩ、10KΩ、47KΩ の 5 段階から選ぶことが可能となっています。Ph3D のフロントパネルには電源のオン・オフを行うトグルスイッチと、それに連動して点灯する赤色のインジケータが搭載されており、より確実な使用を実現しています。



Specifications

入 力	: RCA×1 系統 (アース端子付)
出 力	: RCA×1 系統
ゲイン	: 40dB (100 倍)、45dB (178 倍)、50dB (316 倍)、 55dB (562 倍)、60dB (1,000 倍)
負荷抵抗	: 100Ω、200Ω、1KΩ、10KΩ、47KΩ
サイズ	: 432W×51H×305D/mm
質 量	: 4.1Kg (乾電池除く)
電 源	: 単一型アルカリ乾電池 16 本 (内蔵)
電池寿命	: 1,200 時間以上
標準価格	: \198,000 税別 (予価)

価格ならびに仕様は予告なく変更となる場合があります。